

一、戦後の総括

七十五年前の戦争で負けた日本は、アメリカに占領され洗脳された。アメリカは民主主義国家の模範とされ、二度と日本がアメリカを攻めないように「日本は悪い国だ」という固定観念をしつこく植えつけた。その一方でインテリの一部は、ソ連や中国、北朝鮮を理想の国とたたえていた。

その間日本の大衆はアメリカとの安保の保護の下、ひたすらに働き、日本を世界有数の経済大国にし、かつ七十年の平和を保ち続けた。その間に世界は戦争・紛争・テロを繰り返し、ソ連やベルリンの壁は崩壊し、社会主義・共産主義の幻想は消えていった。

二、日本の特徴

世界から尊敬され、国土も住民も言語も、二千年近く連綿と続く、他に類を見ない国、日本世界の人々が日本のことを知りたがっているとして、「あなたのお国のことを教えてください」と

言われたら、あなたはどのぐらい正確に答えられるだろうか。日本国民の勤勉さや礼儀正しさ、生活の安全、物品の豊かさ、鉄道の便利さ、清潔さなどが世界の人气的になっている。もつと歴史ある国としての自信を持つべきであるが、日本の教育は日本や日本史・日本文化に関する教育を欠落させがちである。

日本は常に改革

日本は古い物を大切にしつつ、新しい物を取り入れている。その一つ目は中国文化であり、漢字や仏教も取り入れてきた。漢字には苦労したが、ひらがなとカタカナを創造し、国粹文化をつくりあげた。次に二つ目として、鉄砲とキリシタン・南蛮文化を取り入れて、戦国時代の戦いを一変させた。国内に平和な文化国家を作った江戸時代には、日本の国民の識字率を世界一にしている。

三つ目は黒船来航により西洋に大幅に立ち遅れていることに気づいた時のことだ。漢文と蘭語から英語へと第一外国語をスイッチ。西洋の文明から文化や政治、軍事を取り入れ、政府の責任者から数十名が欧米の実社会を見学しその差を確認したことから、翻訳と国民の教育に力を注いだ。日本語の中に西洋文物の漢語による翻訳語を二十万も作り、国をあげて西洋諸国の植民地化を避けるために、新しい書き言葉・話し言葉を造りあげた。

四つ目として戦後も漢字や文体を簡素にして、教育の大衆化を図り、一時はジャパン・アズ・ナンバーワンといわれるほどの大成功を収めました。

ただ、現在はグローバリズムの美名の下、政府が小学生から英語に力を入れているように見えるが、すべては日本語ができての話であることを忘れないように。

幼児・小学生の英語について

あまり力を入れすぎると日本語でのコミュニケーション能力の妨げになることが懸念される。英語教育ばかりに熱心になるのではなく、母国語である日本語をしつかり覚えていくことを疎かにしてはいけない。下手すると日本語も英語も不自由になることがある。幼児期や小学生の間は母国語である日本語で外の世界と関わり、どんどん世界を広げていく時期である。

三 日本語について

日本人は日本語に自信がない。日本人は日本語を難しい言語だと思いつぎていて、日本語に自信を持ってない。三歳までに脳は母親など保育者との密接な関係により、言語構造の基礎を作り上げる。

耳のできる前から胎内で言葉を受け取っている。こうして母語を身につけていく。八歳までに

完成させた母語を駆使し、直感と感性を総動員して、発想力と論理的思考へつなげる。十二歳までに母語で脳を築きあげる。

英語の時代に日本は発信国になるべき

今は欧米から学ぶことは少なくなりつつある。

それに伴い、日本は受信型の国から発信型の国へ変えるべき時代が来ている。外国語の習得は多様化すべきであり、世界的視点から見れば、日本語も外国語の一つである。

日本語を学ぶ外人の数も急増中だ。英語時代も多様化しつつあり、英米語ばかりが英語ではないことも現実である。

英語の教科書も、日本人の生活を英語にしたものをもっと取り入れたいものだ。

日本人は日本語を大切に

戦後日本語も日本列島も安泰だった。しかし、今後数百年この状態が続く保証はされていない。日本語の盛衰は、日本という土地と運命的に結びついている。日本語を母語とするのは、地球上ただ日本のみだ。一方日本文化に憧れ、日本語を学ぶ人も増えつつある。

日本語は、漢字は難しいが発音は世界で一番簡単だ。オバマ大統領も真珠湾で「オタガイノタメ」などといっていた。

四 今後の見通しと対策

現実の世界は英語の時代にあるが、画期的自動翻訳機の開発もありえるし、歴史をふりかえればアメリカの覇権が永遠に続くとも思えない。一方日本語は人口減少と英語の日本語への侵入、国語教育の質と量の低下などで必ずしも安泰ではない。日本に住む外人も増えつつある。新たな日本英語を容認し、各国人と交わり、そして日本人は日本語でしか創造性のあることは考えられないことを念頭においてほしい。

五 日本の生きる道

高齢化および少子化の日本の生きる道は、科学技術立国・貿易立国と、その他に観光立国もある。自然・気候・文化・食のいずれもがその基礎として備わっているからだ。遠いと思われる欧州からも観光客を集めようではないか。

最後に

過去と対話せず現在と語るのみでも、生きるだけなら生きていける。しかしそれでは自分がどこにいて、どういう道筋をたどつて来たのかがわからない。我々が安心して、また自信を持つて現在を生きるには、過去に話を聞く必要がある。「古いことはわかりません」というようでは、浅薄にしか生きていけない。

この本は若人や子育て中の両親に対し、日本や日本語の過去をふりかえりつつ、日本語の教育にもっと力を入れ、日本からの発信を増やすべきことを、一学習塾の経営者に過ぎない筆者が主張するものだ。なお文中の古歌・古文は音読すれば日本語のよさが一層味わえるはずである。